

# 神戸堰公園あずまや

島根県 出雲市 都市建設部 建設企画課 山本 学

## 1. はじめに ～神話の夢舞台“出雲”～

出雲市は、島根県の東部に位置し、北部は国引き神話で知られる島根半島、中央部は肥沃な出雲平野、南部は中国山地で構成され、古くから「神話の國」として知られた地域です。

古代出雲は、神話や伝承に彩られた世界観があり、出雲神話と言われるものには、二つの系統があります。一つは、国家の成立に関わって創られた『古事記』や『日本書紀』に見られる「八岐大蛇（やまたのおろち）」神話や「國譲り（くにゆずり）」神話です。もう一つは、出雲で編纂された『出雲國風土記』に見られる「国引き（くにびき）」神話等です。その象徴が、國づくりと國譲りの偉業を称え大國主神（おおくにぬしのみこと）の住みかとして作られた巨大神殿“出雲大社”です。平成12年に出雲大社の発掘調査で巨大神殿の姿が浮き彫りになり、神話がいかに身近な話として現実味を帯びています。

一方、出雲平野は、中国山地に源を発する斐伊川と神戸川という山陰有数の二大河川により形成された沖積平野で、斐伊川は平野の中央部を東進して宍道湖に注ぎ、神戸川は西進して日本海に注ぎ、日本海に面する島根半島の北及び西岸は、リアス式海岸が展開し、海、山、平野、川、湖と多彩な地勢を有しています。

当市は、東西約30km、南北約39kmの範囲に広がり、面積は543.4km<sup>2</sup>で全県面積の8.1%を占めており、人口は、平成17年までの30年間、増加傾向で推移してきましたが、平成17年に146,307人（国勢調査）となり、初めて前回調査から653人の減少に転じました。年齢別の構成比を見ても、昭和35年と平成12年を比較すると、この40年間で年少人口は半減、高齢者人口は3倍近く増加し、少子高齢化が急速に進んでいます。

産業面においては、農業で県内トップ、工業生産額、商業販売額で第2位の経済基盤を有しており、山陰自動車道、河下港、JR山陰本線など交通、物流の拠点となっています。また、島根県と全国を結ぶ空の玄関口出雲空港にも隣接しています。

市内には、島根大学医学部附属病院、島根県立中央病院、市立総合医療センターなどが集積し、県内有数の高度医療機関群を形成しているほか、観光面においても、出雲大社をはじめとする古代出雲文化遺産と海、山、川、湖などの豊かな自然資源を有し、

島根を代表する観光地となっています。

## 2. 斐伊川神戸川治水事業

～安全な斐伊川・神戸川をめざして～



工事の進む斐伊川放水路

斐伊川では8世紀始めに「出雲に大洪水あり」との記事が見られます。近世に入ると洪水の記録が多く残され、ほぼ4年に1回の割合で洪水が発生しています。明治時代以降も台風や梅雨前線による洪水で大災害が相次いでいます。

明治時代に入ると、藩体制が廃止され、膨大な費用を必要とする斐伊川の治水工事を行うことが難しくなりました。しかし、斐伊川（天井川）の河床の上昇は進み、相次いで洪水に襲われました。特に明治26年の洪水は、流域に甚大な被害を与えました。この洪水を契機に、明治29年、内務省において松江藩時代に計画された放水路計画案が再検討されました。さらに、大正12年に放水路計画と直轄改修計画が検討され、斐伊川本川を改修する「直轄改修工事」が着手されました。

直轄改修工事は、昭和19年に第一期工事が完了しましたが、工事完了前後の昭和18年と昭和20年に相次いで洪水に襲われ、この洪水は、斐伊川流域のみならず、神戸川流域にも大きな被害を与えました。

これを契機に斐伊川、神戸川の抜本的な治水対策として両河川の合流案が再び勢いを増し、関係地域で賛成と反対の両方の議論を呼びました。その後も放水路案、ダム案が議論されますが、地元の反対等により本格的な着手に至りませんでした。

昭和47年7月の洪水を契機に、斐伊川の抜本的な治水対策が重要かつ緊急の課題と認識され、県が斐伊川治水計画に対して推進姿勢を明らかにし、昭和50年「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画」が発

表されました。これは、斐伊川・神戸川両水系を一体として、上流部のダム建設、中流部の放水路、下流部の河川改修がお互いに治水機能を分担し合う治水計画で、いわゆる“3点セット”と呼ばれるものでした。

「古事記」にある『八岐大蛇（やまたのおろち）神話』の元になったという説がある『斐伊川』は、古くから度々洪水を起こし、流れを変え、その都度、流域の住民を苦しめ、斐伊川・神戸川治水事業は、この暴れ川を治めるため、三つの事業が一体となって治水機能を分担し、斐伊川・神戸川流域の尊い人命や貴重な財産を洪水から守る、島根県の『百年の大計』であり、また、『平成のおろち退治』とも言われています。

昭和57年、中流地域の放水路事業予定地である本市が事業の同意をし、放水路事業予定地の本調査と用地買収が開始されました。平成6年には、斐伊川放水路事業起工式が行われ、放水路工事が本格的に開始されました。斐伊川放水路は、洪水時に斐伊川の水の一部を神戸川に分流し、斐伊川下流部や宍道湖の水位を下げるとともに、神戸川の拡幅により両河川の安全性を高める役割を担っています。本事業では、自然環境や生態系に配慮した整備と親水性の高い水辺空間の形成を図る多自然型川づくりも進められています。

治水対策の3つの柱（3点セット）の内、上流のダム建設事業は、志津見ダムが完成し、尾原ダムも試験湛水中です。中流の斐伊川放水路事業は、平成20年代前半に完成予定であり、今後、下流の大橋川改修事業の早期の事業推進が重要となっています。

### 3. 水辺施設の整備経過、説明



日本の近代土木遺産 “旧神戸堰”

神戸川には、農業用取水堰として、『神戸堰（かんどぜき）』があります。斐伊川放水路事業によって神戸川を拡幅するには、この神戸堰を改築する必要があります。撤去する神戸堰は、アーチ型のコンクリート製で、沿川の高松町と下古志町の相対する地点に、昭和3年に設置された農業用取水堰(延長

94.55m 堰高1.8m) です。

全八基から成る多連型アーチ（直径約9m）式の堰で、建設当時は、セメントなどの資材が少なかったため、アーチ状にすることで、構造上の強度を確保する工夫がされたようです。「日本の近代土木遺産」にも選ばれ、鉄筋コンクリート多連型アーチの農業用取水堰としては日本で唯一のものでした。

完成当時の用水受益面積は、左岸側（下古志町から神西地区まで）230ha、右岸側（高松町から長浜地区まで）399haであり、農地灌漑に合わせて、用水路の維持管理、消防用水として、通年取水されていました。

このように斐伊川放水路事業に伴い、神戸川が拡幅されたことにより、新たな神戸堰が建設されることになりましたが、旧神戸堰をただ撤去するのではなく、近代の河川構築物の傑作“旧神戸堰”のアーチ部分の一基を移築し、記念として、神戸堰付近に、「神戸堰公園」を整備し、この公園内に、“旧神戸堰”をモニュメントとして、設置しました。

神戸堰公園は、神戸川を望む堤防上隣接し、付近を散策する人の休憩施設としての役割もあります。

ただ、当公園には、散策中の休憩施設としてあるのは、ベンチのみで、屋根のある休憩施設がなく、利用者から神戸川水辺散策の休憩の場としての「あずまや」整備の要望があがりました。

そこで、(財)リバーフロント整備センターが(財)日本宝くじ協会の助成を受けて行っている「水辺施設の設置事業」として、『神戸堰公園あずまや』をご寄贈していただきました。



神戸堰公園あずまや

### 4. おわりに

今回、(財)リバーフロント整備センターのご協力をいただき、水辺施設「神戸堰公園あずまや」が完成しました。

斐伊川放水路事業の完成も間近に迫り、治水機能も上がります。一方で、住民の健康増進等のための散歩、散策の憩いの場として、神戸堰公園の中に、水辺施設が完成したことは、市として喜ばしいことであり、住民に活用していただけるよう、施設の維持管理に努めてまいりたいと思っています。